

ス会に出られないかもしれない」という連絡だった。林間学校や学習発表会の張り切った学習態度が自信となって、勇気をもって電話をかけてきたにちがいない。自信さえつけば、M夫の能力は、今の何倍にも発揮できると確信させたでき事だった。

中 まっ先に手をあげて先生をおどろかす。……N夫

固い殻の中にとじ入り、自分から発言したりする事はほとんどなく、質問をしても数分間待たないと質問に答えられなかったり、全く別の事を考えていて質問がわからないので有名だったN夫が、二学期の後半から自分から「ハイ、！」と手をあげる回数が目立ちはじめ、学習中の話し合いにだんだん参加するようになった。家では自室にとじ込んでぼんやりしていたり、弟や母に暴言をはくなどの二面性を持っていたが、最近は家族と一緒に過す事が多くなり、冬休みには、「みんなでトランプがしたい」と母親に要求し、家族でトランプを楽しんだ事が報告された。地域では、特殊学級の同級生以外は、道で出逢っても顔をそむけたり、絶対に遊ばなかったのに、最近は、公民館で卓球をしたり、バトミントンをする仲間に入るようになった。二学期の終わりに、「二学期に一番よくしゃべるようになったり、勉強をがんばった人は誰だろう」と生徒に問いかけると、生徒は一せいにN夫を指さした。

以上、学習の経過に合わせて見られた、生徒の特に目立った行動を挙げた。私たちの知っているのは、生徒の生活のほんの一部であり、ここに挙げたのは、またその中のほんの一部分である。生徒たちは、もっといろいろな形で育ち、いろいろな所にその効果を生かして生活しているにちがいない。私たちは、表面に表われたこれらの望ましい行動と、それを支える学級集団や学習の雰囲気からそれを感じ取るのである。

#### 4 表現化に視点をあてた音楽の指導について

私たちは、精薄児の教育にあたって、ただ社会生活に何とか適応し、職業をもって自立できるようになることをめざす以前に、美しいものを美しいと感じ、周りの動植物をいつくしみ、友だちを思いやり、目上の人を尊敬し、常に感謝の気持ちを忘れず、心安らかな日々を送ることができる全人的な人格に育てたいと思っている。そのための手だての一つとして音楽指導があげられる。

そこで、音楽指導について、もっと具体的に述べてみたい。

音楽に対する興味・関心を持たせ、学習に集中して取り組ませるなかで、音楽の好きな生徒を育てるための手だてを、あれこれと考えてみた。学習は、ただ単に技能を高め、音楽的な理解を深めるためのものであってはならず、活動のなかでは、『教師は先生ではない。共に学習する友だちである。』という意識が失なわれてはならない。と同時に、自分一人が楽しむものではなく、そこには、教師も友だちも共に楽しむ活動が生まれてこなければならないと思うのである。

共に学ぶ姿勢の中にも、教師として心がけなければならないことを頭に置き、自身を戒めている。

① 自ら進んでやろうとする意欲を持たせる。……賞賛・激励・競争等、時に応じて生徒の心に訴えかける。

② 生徒に退屈させない。……技能的な指導に終始せず、学習活動に変化を持たせる。

③ いい演奏に触れさせる。

④ 生徒に満足感を持たせる。

美しい音に触れたり、美しい表現を工夫したりするなかで、心の豊かな、そして美しさを感じることでできる心を持った人間に成長してくれることを願って、音楽と取り組んでいかなければならないと考える。

以上の留意事項を、さらに砕いて述べてみたい。

#### (1) 生徒に意欲を持たせる指導

教師の指示通りに生徒を活動させることも、なかなか大変なことである。しかし、指示されたことに対して、いくら忠実であっても、そこに生徒の主体性がない限り、学習の進展は見られない。生徒の心が、ひとりで動き出し、さまざまな活動をひき起こすことができれば、これほどすばらしいことはない。

鍵盤ハーモニカを使った一斉指導を例にとって考察してみよう。



この『川は呼んでいる』という教材の指導する場合、どう頑張っても、二名の生徒はうまくいかない。最初の4小節もままならないのである。そこで、ト音にシールを貼り、次のように吹かせる。



時々、不協和音となり、少々気にはなるが、結構うまくハーモニーができる。何よりも本人が大喜びで演奏に加わるのが嬉しい。この要領でいけば、『かねがなる』『かえるの合唱』等は、うまくいく。

もっとも、鍵盤ハーモニカの一斉指導が難しい教材も出てくる。その時には打楽器を加えてリズム伴奏を入れる工夫をさせる。曲想に合った打楽器を考え、それをどう打つかは、生徒同士で決めさせる。その結果、非常にユニークな演奏が展開されるが、それは決してこっけいなものではなく、教師の固い頭から出るしゃくし定木なリズムより、よほど味わいのあるものである。

生徒たちが、意欲的に取り組んだ学習の成果は、その場限りで終わらせてしまうにはもったいない。これは、そのまま生活の場面で生かされるよう考えなければならない。音楽を生活のなかに取り入れる工夫は、本校においては、いろいろな場面をとらえて生かし、使われるよう計画され、実践されている。

音楽の学習は、時には生活単元学習と並行して、それと関連した内容の指導が試みられるが、これは、音楽と生活とを密着させていこうと考えているからにはかならないのである。

## (2) 生徒を退屈させない指導

学習に取り組む姿勢が好ましいか否かは、導入の段階ではほぼ決まる。最初の数分間を、生徒の心を柔げることに費してみた。

- ① 曲あてクイズ……曲の題名をあてる競争。ついでにひとふし歌ってみる。
- ② アップ・ダウンクイズ……ピアノの演奏に合わせて室内を行進し、演奏が止まったらその場にしゃがむ。何回もくり返していくうちに、動作の速い者が最後に残る。二人組・三人組でもできる。
- ③ テンポを変えて歌う……やや速めに歌ったり、ゆっくり歌ったりする。趣きがかわっておもしろがる。
- ④ 歌い慣れた曲に、簡単な振りをつけ、身体表現をしながら歌う。
- ⑤ 二組に分かれ、それぞれ指示された音を、教師のサイン通りに鍵盤ハーモニカで出す。

喜んで取り組ませるための手だては、単に導入の段階のみでなく、学習活動全般を通して考えなければならないが、だからといって興味・関心にばかりとらわれて、内容の浅い学習になってはいけない。

## (3) 生徒を美しい音に触れさせる指導

本校には、コーラス部・ブラスバンド部も、鼓笛隊も編成されていない。音楽の学習も、多い時で10人、少ない時は3人といった寂しさである。これだけの人数では、ボリュームのある音感が得られるはずもなく、大勢で合唱したり合奏したりする時の、あのずっしりとくる音の重みを味わわせることはできない。加えて、優れた表現能力を持った生徒が、そう多くいるはずもないことから、しばしばレコードを使う。

レコード鑑賞という大げさな名目で扱うのではなく、四季折り折りの曲を精選しながら学習のなかに取り入れていくのである。時にはレコードに合わせて歌わせることによって、自分の声が美しいハーモニーの中に溶けこんでいくのを感じさせてやることもできる。

レコードを扱うもう一つのねらいは、曲から受ける感じをその子なりにつかませることにある。レコードを聞いて、何を感じ、どんなイメージが湧いてくるかを把握することは、心の豊かな子を育てることにもつながってくる。楽曲の解剖ができなくてもよい。作曲者について知らなくてもよい。理屈はわからなくてもよいから、レコード鑑賞の好きな子どもをつくりたい。

## (4) 生徒に満足感を与える指導

歌唱指導を例にとって述べてみよう。

| 教師の呼びかけ・動作     | 生徒の活動・反応          | 留意点         |
|----------------|-------------------|-------------|
| ①「元気よく歌おうね」    | ①大声を張り上げる。音程は不確実  | ○楽しく歌わせる。   |
| ②「本当の音を出してごらん」 | ②のどの力を抜いて柔かく歌おうとす | ○技能面での指導の手が |

| 教師の呼びかけ・動作                                                                                                   | 生徒の活動・反応                                                                                                                                                                  | 留意点                                                                                                        |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ③鍵盤ハーモニカで $\dot{\text{ホ}}$ 音のあるフレーズ演奏<br>④範唱<br>⑤ $\dot{\text{ホ}}$ 音の発声練習<br>指で“高く・低く”のサインを示す<br>⑥努力したことへの賞賛 | るが、高音( $\dot{\text{ホ}}$ )が上がりきらない。<br>③鍵盤ハーモニカに合わせて、部分的にゆっくり歌う。<br>④範唱に合わせて歌う。<br>⑤音が低い時は、“もっと高く”のサインが止まるまで、声の高さを上げていく。<br>⑥「本当の音が出たよ」「本当の音に近づいたよ」ということばによって、ある程度の満足感を得る。 | かりとする。<br>○反復練習<br>○声の確かめをさせる。<br>○教師と生徒は一対一で。<br>○音の高さを感覚的にとらえさせる。<br>○一斉指導<br>○努力したことへの賞賛だけは、常に忘れてはならない。 |

教師は、時には激励し、時には補助し、時には賞賛しながら、反復練習を重ねていくわけではあるが、技能的な指導は、ややもすると単調な活動になりがちである。

さらに、本校の生徒の実態から、教師のねらいとする時点に、どうしても到達できない場面が出てくる。上の例で述べるならば、 $\dot{\text{ホ}}$ 音の発声が困難であったり、反復練習の過程で指導上の無理があったり、指導法のまずさから、生徒の意欲がそがれたりすることが起こった場合、教師は場に即して次の手だてを考えなければならない。

つまり、 $\dot{\text{ホ}}$ 音の発声に無理があれば、移調という形をとって、曲全体の音程を下げることも考える。あわせて、教師の範唱ばかりでなく、友だちの範唱という形態をとれば、“自分も頑張れば何とかできるのでは……。”という意欲をかき立てることもできよう。

生徒に満足感を与えることは、単に楽しませることだけを考えるのではない。出来なかったことが出来るようになった、という気持ちが、満足感につながることを忘れてはならないのである。

現在の段階から次の段階へ、さうに進んで次の段階へと、生徒を導いていく過程のなかで、十分に力を出しきって自己を表現させることは、なかなか難しいことである。しかし、生徒たちが音をとらえ、音を吟味し、音を表現していくなかで形成されていく人格は、必ずや社会生活をしていく上においても、よい影響を与えるであろう。音楽が最終的に目指すところは、ここにあるのではなからうか。

音楽指導が、その表現化をめざし、ひいては社会化へのアプローチを意図しながら指導する体制のなかでは、生徒たちが、音楽を生活の中に生かし、自分の生活を豊かにしようと努める姿勢をもってくれることを願い、学校行事のなかにも、積極的に音楽を取り入れる必要がある。

宿泊学習のレクリエーションで

キャンプ・ファイヤーで

大山林間学校のキャンドル・サービスで  
学習発表会で

クリスマス会で

数ある既習曲のなかから、生徒たちは、積極的に歌うことを取り入れ、時には振りをつけながら、楽しむことを覚えた。

例えば、大山林間学校でのキャンドル・サービスでは、生徒たちが自主的にプログラムを構成し、ふんだんに音楽を取り入れ、振りや動作をつけながら張り切って練習する姿が見られた。その時の生徒たちの表情は、生き生きしており、精神的に非常に充実しているように思われ、機会を見つけては、音楽をどんどん生活のなかに取り入れていく姿に頼もしさを感じたものである。

#### (5) 今後の課題

以上述べてきたことは、音楽科の指導をする者全てが、日ごろ気を配っていることであり、本校でことさら目新しい試みがなされているわけではない。

こういった試みの積み重ねのなかで、特に本校の生徒に対して配慮しなければならないことは音楽指導は、音楽の時間にするものだという観念を持たないことである。歌ったり、演奏したりするばかりが音楽であるとは限らない。身体を動かすなかにも、話すことばのなかにも、必ずリズムがある。これらは、音楽の領域に包括されるものであると考える。生活がすなわちリズムであり、このリズムを表現し、身につけさせていく過程のなかで、生徒の心は安定し、それがやがて大人となつてから周りの人たちに愛されることにもつながってくるのではなかろうか。

今後の指導をより確かなものにしていくために、次の目やすを掲げる。

#### ① 生徒のひとりひとりを大切に、それぞれに合った表現方法を明確にする。

表現能力の水準を一律にせず、ひとりひとりの能力や個性を生かす手だてを考える。つまり、一斉指導で、全員を同じレベルまで引き上げようとするよりも、各人の分担した表現力がひとつにまとまって、全体を構成していくような指導法を試みる。

#### ② リズム指導が全ての教材の根底にあることを忘れてはならない。

強拍、弱拍の感覚が身につけば、シンコペーションも、弱起の曲も、抵抗なく生徒の心に入りこむこともできよう。歌唱・器楽・鑑賞教材のいずれにもリズム指導を根底とした身体表現を取り入れる工夫をする。

#### ③ 生活と結びついた教材を多く取り入れる。

本校の生徒は、健常児に比べて生活経験が少ない。行事の歌、季節の歌、お話の歌等を取り入れていくなかで、イメージをふくらませてやる工夫をする。

生徒たちの社会化を目指していくために、音楽科では、特に表現化に視点をあてて取り組んでいるが、人間として大切な『感じる心』が培われていくことを願って、今後さらに精進したい。